

幸野棹嶺の業績について

美 澄 政 博

一

棹嶺弘化元年三月三日京都に生れ、明治二十八年二月二日京都に死歿し、其間五十有二年を京都畫界幾變遷の中に終始した。棹嶺自筆になる自傳「香雲春秋」^(註一)に依れば、名は直豐、字は思順、通稱角三郎、なほ長安堂、青龍館、六柳北圃、金仙茶寮、香雲深處、無聲詩屋、三守蝸室、如意山樵、春風樓、鶴鹿園、在五菴、雪廼家等の別號を有した。嘉永五年二月五日（九歲）始めて中嶋來章に就き、十七歲「猿鳥復讐圖」を圓山正阿彌の展觀に出品し先輩鈴木百年等に認められ、明治四年（二十八歲）來章門より轉じて鹽川文麟に師事した。文麟は其晩年如雲社の主柱として畫界に鎮を爲し、京都博覽會の創設に與つて力を致し畫學校設立に關しても衆に先んじて意見を有てゐたと云はれる。棹嶺が此の文麟に賛を執つた事は彼後年の行動に益する所甚大であつた。彼は恆に鹽川派の後繼者を以て許した。

如雲社は其組成以來京都畫家の大部分が是に包容されてゐたが、

文麟歿後其經營は森寬齋が當り純然たる風流雅會として寬齋の歿する迄繼續したが、現存する如雲社展觀目錄等に據れば時に棹嶺等の参加も看られるが、概して寬齋を中心とする範圍に限定されて行つた如くである。大部分の京都畫家の眼は漸く興隆期に入れる新畫運動に注がれ、明治十二年畫學校の創設があり續て五十七年と内國繪畫共進會が京都畫家を驅つて全國的な活動に捲き込むに及び此傾向は著くなつた。棹嶺亦此時潮に投せる一人と云ふべきで彼が京都畫壇の先覺を以て稱せられる事は既に久しい。本稿に於ては此間に於ける棹嶺の業績に關し調査し得たる範圍に就て記録して見度い。

註一「香雲春秋」(幸野西湖氏所藏)に據れば

七年 師に付て手習算術讀書を學ぶ

九年 二月五口中嶋來章に就く。此年四月圓山正阿彌の展觀に「花菖蒲の圖」出品

(昭和十一年春京都博物館幸野棹嶺遺作展覽會は「九章幸梅嶺」と款せる紙本淡彩「秋月孤雁圖」を出品せり)

十六年 九月父歿し其翌日今田梅齋なる者始めて棹嶺に入門す

十八年 始めて畫を以て出遊す

廿四年 畫業開業於柳馬場六角上ル、此年中嶋來章娘宇楚と結婚し直に離別。又禁

裏御用鴨居隠し御屏風「水墨松嶋橋立の圖」勤む

廿五年 村岸氏と結婚、再度和せずして直に離別

「香雲春秋」は模嶺廿五年を以て終る。

註二 幸野模嶺當の如雲社展觀目錄（年次不詳八月十一日）一冊原在寛氏所藏。

註三 明治廿三年一月十日、東山正阿彌樓に於ける如雲社展觀目錄（原在寛氏藏）中

より重なる出品者を舉ぐれば、鈴木百年、同松年、同春香（百年妻）、土佐光氏、森川曾文、望月玉泉、原在泉、國井應陽、谷口謫山、重春塘、中嶋有章、竹内棲鳳、上村松園、山元春舉、森寛齋（竝に其門下生約二十人）等々、此外に地方畫家として大津より清水東陽、伊勢より磯部百麟、伊豫より松浦徹暉又東京よりは、野村文舉、川端玉章等の参加がある。此の展觀は新年發會で特に盛會であつたと思はれるが、平素の月次例會に於ては三十人足らずの出品者で其大部分は寛齋門下であつたらしい。原在寛氏所藏の月並展觀畫錄に是を窺ひ得る。

二

明治十一年八月田能村直入は京都府知事榎村正直に畫學校設立を建議したが、翌九月には幸野模嶺、望月玉泉連署、久保田米僊、巨勢小石副署で亦畫學校設立の陳情を行つた。是は模嶺の筆に成るもので直入が漢文を以つてせるに對し、之は和文によつた。^(註一) 先づ畫の功を論じ國家有益の畫業を玩弄小技の位置に置くは歎すべきであるとし、宜しく畫學校を興し斯業を獎勵し益々國家に裨益せしめん事を陳情の主旨とせるものである。而して教授の方法としては

洋畫流漢畫流皆混一シテ各其良師ヲ選ミ、以テ生徒ヲ教道セバ百工ノ爲ニ裨益アランコト最モ尠カラザルベシ

と述べ直入の建議書に「不管南北宗派各擇其師」と云ふに同じである。又直入は其結文に於て「天若假於癡餘命欲今後遊歷四方張瘦拳

幸野模嶺の業績について

賣拙技募資以獻之」と云ふに對し、模嶺も「年齡未ダ強壯ノ間ニ在リ御採用被爲在候ハゞ盡力周旋仕度依是拙陋ヲ顧ミズ伏テ奉懇願候」と結んでゐる。

此の建議は榎村知事の許容する所となり、十二年畫學校の創設を見た。此間直入は知事の紹介狀を持つて諸地方を歴遊し畫を作つて資金を蒐むるに努力し、やがて其功に因つて用掛（十三年）となつた。十三年六月には假校舍も京都御苑内舊准后里御殿に決し、同月廿三日教員選舉會が開かれた。即京都在住畫家四十三名に出仕を命じ、それを東西南北の四宗（後述）に分屬せしめ各宗より一名宛（北宗のみ二名）教員を選出せしめた。而して東宗望月玉泉、西宗小山三造、南宗谷口謫山、北宗鈴木百年、幸野模嶺の當選を見た。

四宗に關しては、榎村知事より文部大臣宛の「畫學校創立御届」（十二年十一月廿九日附）に

今般府下校舎ヲ建設シ畫學校ト名ケ、課業ハ東西南北之四宗ニ
ニ順ヒ土佐狩野等皇國特別ノ畫ヲ東宗 大別シ
トシ、野畫、水畫、油畫等ヲ西宗トス

と説明されてゐるが、十三年八月の生徒募集府令に^(註三)

京都畫學校四宗^{東宗日本寫生畫大和繪ノ類、西宗西洋畫、南宗文人畫、北宗狩野雪舟ノ類}

と更に明確にされてゐる。

然に是に依れば模嶺、百年は北宗教員であるから狩野、雪舟派の教員と云ふべく、更に又北宗に限り二人の教員の選出が見られる等は留意さるべきであらう。併し百年は同年七月辭任し模嶺北宗專擅と爲つたが、翌十四年四月には模嶺も亦辭任し鈴木松年が後を襲つた。

斯くて榎嶺の任期は一年餘に過ぎなかつたが、彼の此の間に於ける業績として残るものに畫學校建築平面圖があり、彼の畫學校に對する抱負理想を察知し得る。是は直入の建築平面圖と共に京都美術工藝學校に現存し、榎嶺の圖に「北宗副教員幸野榎嶺」とあるに據り、彼は十三年四月廿一日副教員より三等教員に任ぜられてゐるの^(註四)で、それ以前の製作になるものである。圖は兩者共東西七十間、南北三十間の同一地面に對するもので、公堂を中心に四宗の教室(塾)を配し、其に賄方、事務局、女塾等を附屬せしめたものである。兩圖を比較するに榎嶺の圖が、菓樹園、菜園、花卉園、養魚池、養鷺池、蓮池、工業所、運動場等を設計せる點は甚異彩を放つてゐる。畫學校退職後の榎嶺は七月に至つて私塾を開いた。^(註五)明治十六年門下生は六十餘人を算し、塾制を正則、變則、給費とし畫學校に準じた組織として教育したと云はれる。

註一 京都市立美術工藝學校沿革略所載に據る。

註二 同右。

註三 同右。

註四 同右。

註五 幸野榎嶺自筆履歷書草稿に據る。是は榎嶺四十六歲(明治廿二年)の作で幸野西湖氏に所藏さる。其全文は次の如し。

履歷書

京都府京都市元上京區神明町十九番戶

平民 幸野 榎 嶺

四十六年

一 嘉永三年二月ヨリ安政元年七月迄高橋良輔ニ就キ習字算術讀書等修業

一 嘉永五年二月ヨリ慶應二年十二月迄中嶋來章ニ就キ圓山派畫學修業

- 一 慶應三年二月ヨリ私學開業
- 一 同年五月ヨリ明治三年十二月迄神山四郎ニ就キ支那學修業
- 一 明治四年一月ヨリ同年五月マデ鹽川文麟ニ就キ吳春派畫學修業
- 一 明治十四年七月ヨリ私塾開業
- 一 明治十三年六月京都府立畫學校出仕被命
- 一 同年同月卅日京都府立畫學校副教員被命
- 一 同十四年四月京都府立畫學校三等教員被命
- 一 同十五年九月内國繪畫共進會審査官被命
- 一 同年十月同會特別審査官ニ當選ス
- 一 同十七年四月第二回内國繪畫共進會審査官被命
- 一 同年五月同會特別審査官ニ當選ス
- 一 同年十一月大阪繪畫品評會審査員被命
- 一 同十八年四月東洋繪畫會學術委員被囑任
- 一 同年九月愛知縣私立繪畫共進會審査
- 一 同十九年五月石川縣私立繪畫品評會審査係被委囑
- 一 同廿一年三月京都府第一部雇ヲ被命
- 一 同年同月畫學校畫學講話ヲ被囑託
- 一 同廿二年二月京都府立畫學校教頭心得被命
- 一 同廿三年一月京都美術協會評議員ニ當選ス
- 一 同年二月京都美術博覽會出品獎勵員ニ當選ス
- 一 明治九年六月京都博覽會ニ於テ褒狀ヲ受ク
- 一 同十年六月同會ニ於テ第三等妙技賞銅牌ヲ受ク
- 一 同十一年六月同會ニ於テ進歩褒狀ヲ受ク
- 一 同十二年六月同會ニ於テ第二等妙技賞銀牌ヲ受ク
- 一 同年同月同會ニ於テ第三等妙技賞銅牌ヲ受ク
- 一 同十三年六月同會ニ於テ第二等妙技賞銀牌ヲ受ク
- 一 同十四年六月同會ニ於テ第三等妙技賞銀牌ヲ受ク
- 一 同十年十一月内國勸業博覽會ニ於テ褒狀ヲ受ク
- 一 同十五年十一月第一回内國繪畫共進會ニ於テ百鳥畫譜ヲ著ハスノ廉ヲ以テ褒狀ヲ

受ク

一同年同月同會ニ於テ嘗テ畫學校ヲ興サン事ヲ建議シ開校以來尙后進獎勵ノ廉ヲ以テ褒狀ヲ受ク

一同十六年五月第八次奈良博覽會ニ於テ第二等賞銀牌ヲ受ク

一同十七年五月第二回内國繪畫共進會ニ於テ第二等賞紅綬銀章ヲ受ク

一同年同月第九次奈良博覽會ニ於テ第一等賞金牌ヲ受ク

一同年六月京都博覽會ニ於テ第二等妙技賞銀牌ヲ受ク

一同年十一月大阪繪畫品評會ニ於テ第一等賞金圓若干ヲ受ク

一同月京都博覽會ニ於テ第三等妙技賞銅牌ヲ受ク

一同年十一月愛知縣私立繪畫共進會ニ於テ第二等賞銀章ヲ受ク(註、十八年の共進會の誤であらうか。)

一同廿年五月横濱繪畫展覽會ニ於テ第二等賞銀章ヲ受ク

一同廿二年五月第十四次奈良博覽會ニ於テ第一等賞金牌ヲ受ク

以上

三

明治十五年十七年の兩度榎嶺は内國繪畫共進會審査官に任命され、^(註一)而も兩度共特別審査官に京都より唯一人選任されて、共進會の實際に就て京都畫家中最深く關與し、是より大阪繪畫品評會^(註二)(十七年)、名古屋繪畫共進會^(註三)(十八年)、石川縣繪畫品評會^(註四)(十九年)等の審査員に招聘されてゐる。十九年京都に青年繪畫研究會が開催されたが之は榎嶺の盡力^(註五)に負ふ所大であつた。

畫學校に於ては十七年頃より生徒の「畫學研究會」「新畫共進會」^(註六)等が隨時開催され、且年四回「製作品展覽會」舉行の事もあつたが、各私塾畫學生の横斷的研究會としては之が最初である。しかし此の

幸野株嶺の業績について

研究會には畫學校は不参加に終つた。^(註七)同年六月廿四日日ノ出新聞は

來八月五日より十五日迄畫學校内に久保田社中の藤村麥僊、西村華濤、森川社中の長谷川玉純、三宅文曉、幸野社中駒井龍僊、竹岡湘園等の人々の催しにて繪畫小共進會を開く由

と報じ之が實現せるや否やは明でないが、尙青年繪畫研究會への前哨的事件として留意すべきであらう。而して祇園中村樓に於てフェノロサが演說せるは之が報道寸前の六月十九日であつた。

研究會は八月に至つて急速な具體化を示し、先づ森寬齋日記^(註八)八月六日に

六日ハレ(中略)夕方幸野バイレイ入來亦森川、久保田、内海入來一酌ス尤青年會議ナリ

とあり、榎嶺、米僊の外に寬齋、吉堂、曾文等の参加があり、青年繪畫研究會の包容する青年畫家は是等の人々の門下生を主流とせるものであつたと想像される。

次いで八月十三日日ノ出新聞には、青年繪畫研究會と題し、其組織等に關する次の如き記載がある。

會員は本會保續の資金を投ずるものとして之に報ゆるに出品の繪畫を與ふる手續を定め、贊助會員は毎月展觀畫を寄贈するものとし、毎年春秋二回一週間の開會とし、其會長を森寬齋氏に副會長を幸野株嶺氏に幹事長を久保田米僊氏に推薦し、青年中より八名の幹事を選び云々

八月十一日には關係者の懇親を兼ね第一回研究會の審査員を選出すべき會が駄屋町八新亭で開催された。森寬齋日記十一日には

十一日ハレ(中略)如雲社會出席終日ニシテ午後五時コロリフヤ町八新亭ニテ青年會熟信之爲集會盛ナリ。夜陰歸宅

日ノ出新聞(八月十三日)亦當日の模様を報じ、其に依れば、榎嶺、米僊先づ青年繪畫研究會の主旨を演説し、次いで審査員の選舉に移り特に學士審査員として富岡鐵齋、谷鐵臣が選出され、一般審査員としては谷口藹山、重春塘、内海吉堂、原在泉、岸竹堂、國井應文が決定した。

青年繪畫研究會の第一回^(註九)は同年九月五日より一週間東山雙林寺文阿彌に開催され、入場無料とし廣範な參觀を求めた。繪畫の出品點數は日ノ出新聞(八月十三日)に依れば

出品は府下及び聯合同盟たる愛知同好社、三重攻玉社、石川講究會を併せて凡そ百名二百幀と決定し

と記されてゐる。尙此の研究會は出品畫の圖題を夏山瀑布、池塘浴鷺、菊花雀、南朝忠臣事蹟、二十四孝^(註十)と決定した。

研究會は同月十一日授賞式を舉行し一等に田中一華、菊池芳文、二等に竹内棲鳳等の名を目睹し得る。而して此の審査方法に關し日ノ出新聞(九月五日)に次の如く報せるは留意すべきであらう。

從覽人の投票にて列品中より一二三優等の畫を指名せし者へは、絹畫一幅二品の中者へは紙畫一幅一品の當者へは短冊二葉を送呈するとの定めなるよし。且審査員の審査席へは何人によらず傍聴及び發言を許し汎く公衆の意向を蒐めて等級を定め、愛憎偏頗の誹議なからん様と該會に關係の人々は頻りに盡力あるよし

併し此の研究會は第一回開會のみで遂に中絶の止むなきに至つた。榎嶺は此會の「周旋奔走によつて資財を蕩盡し」又「熱心の餘波同業社會に及び交際上彼是の感情を傷る」如き事態を將來し、其結果

京都を棄て名古屋移住を計劃するに至つたと云はれる。而も榎嶺は「居を名古屋に移し同地の畫家後進者を奨勵し以て愛知をして兩京と鼎立せしめん事」^(註十)を意圖したと云ふに於ては事態の深刻錯雜せるを想像せしめるものがある。

註一 博覽會審査報告に據る。榎嶺は十五年「山家掃衣圖」「秋景山水圖」を出品す(繪畫出品目錄)。而して榎嶺は自己出品畫の審査を辭退した事が明治十七年第二回内國繪畫共進會に際し東上の宿舎より米僊、文學、在泉等へ宛てた書簡中(原在寬氏藏)に見える。

野口幽谷 山名貫義并小生ノ三名ノミ先年ノ例ニ倣ヒ自己出品ノ畫ニ審査御差免ノ義願出候得共此度ハ御許可不相成候

十七年には「花鳥人物圖」出品(繪畫出品目錄)。

註二 榎嶺履歷書による。

註三 大日本美術新報第廿四號所載、榎嶺は「秋胡妻採桑圖」を出品し二等賞(銀印一箇)を受く。現竹内栖鳳氏所藏、明治大正名作大觀所載。此圖には乙酉秋日榎嶺幸豐下榻於鶴鹿園之金桂叢處と款せられてゐるが、幸野西湖氏所藏の「帝釋試三獸圖」にも同じく乙酉の款記あり、共に謹嚴の筆に善く四條派の面目を傳へるもので、榎嶺四十二歳漸く技熟せる時代の作品なるを頷かしめる。

註四 榎嶺履歷書。

註五 金子靜枝は榎嶺十回忌薦文中に次の如く述ぶ。

曾テ君ト初メテ相見ルヤ明治十九年東山雙林寺文阿彌樓ニ於ル京都私立青年繪畫研究會ノ席上ニアリ、此會ハ君ガ畫粹幹旋ニ依テ開カレ青年子弟ヲ鼓舞作興スルノ美舉ニテアリタリキ(京都美術協會雜誌第一四七號所載)。

註六 京都市立美術工藝學校沿革略による。

註七 十九年八月十三日ノ出新聞記事による。

註八 森公舉氏所藏。

註九 森寬齋日記が語る青年繪畫研究會の模様左の如し。

九月三日ハレ午後青谷(三輪青谷)雄山雙林寺手傳ニ行夜ニ入歸ル
四日曇(中略)同夜青年會席宿直青谷

五日雨天雄山早朝文阿彌へ出ル午後予亦出席夕方歸

七日ハレ雄山文阿彌行三輪同予モ午後出席夜ニ入歸宅内海原誘引

八日ハレ本日會場出席ノ所不快ニテ斷ル古名井三輪出席雄山夜前宿直

九日ハレ(中略) 青谷東山出席

十日ハレ折々時雨午前文アミ出席終日ニシテ夜ニ入歸

十一日曇天本日青年會褒賞渡シ式之事出席午時相濟直ニ引取如雲會出席ス

註十日ノ出新聞七月九日及九月十日記事に據る。

註十一 京都美術協會雜誌第十九號所載「帝室技藝員幸野樸嶺君履歷」に據る。

四

明治廿一年三月樸嶺は畫學校講話を囑託され再度畫學校教師に就任したが、同年二月鈴木松年退職し、之が後任であつたと思はれる。しかし樸嶺は廿三年四月卅日附を以て退職し此間二年餘が彼の在職期間に過ぎなかつた。試みに彼在職中の表面に現れたる記録を辿るに次の如き經過がある。

二十一年

三月 幸野樸嶺畫學校畫學講話ヲ被囑託

四月 畫學校にては今度都合により、南宗北宗の區別を廢し總て東洋畫と稱して教授する事に決したりと(四月五日 日ノ出新聞)

五月(十日) 濱尾 フェノロサ畫學校參觀(五月十日 日ノ出新聞)

十二月 府下小學校教員毛筆畫傳習會開催

二十二年

二月 樸嶺畫學校教頭心得被命

六月 出仕菊池芳文、駒井龍僊助教諭を命ぜらる

九月 助教諭菊池芳文依願退職

幸野樸嶺の業績について

十月 教諭田村宗立依願退職 出仕足田敬藏教諭に任ぜらる

十二月 助教諭駒井龍僊退職

同月 畫學校は京都市所管となり、校舎を博覽會東館に移し京都市畫學校と稱す

同月 畫學校紛議起る(十二月廿五日 日ノ出新聞)

二十三年

三月 校舎を知恩院内通照院に移す

四月 教諭幸野樸嶺退職

大體以上の如くであるが、四宗の區別を廢し東洋畫、西洋畫に大別せる學制の改革、出入常ならざる人事の移動、畫學校の紛議、畫學校校舎の轉々たる移轉等種々なる事件が連續してゐる。

東、南、北の各宗を東洋畫と總稱して教授するに至つた時期に就ては明確でないが、日ノ出新聞は(二十二年十二月廿五日)樸嶺が教頭心得となり教務を總べて之を實施したと報じ、而して其理由としては從來の制度では教師が各流派に對立して混一せず各宗分立の勢と爲り校長の統制の行はれ難き點を擧げてゐる。京都日報は廿二年十一月八日の紙上に「昨年九月以來西宗東宗の二科になし」と報じ、又「目下美術の流行に連れ日本畫を讚美するに至りしを以て行々西畫の教授を廢する見込にて」とも報じて學制の改革が日本畫隆盛の風潮に由來すると觀てゐる。而して兩新聞共此の學制上の改變が直接の因となつて西洋畫教師田村宗立が辭職せる旨を報じてゐるは注目すべきである。即ち京都日報(前記二十二年十一月八日)には

(西畫の教授を廢する見込にて) 去月より現在同宗科生徒の外入學を謝絶する事と定めれば、西宗科の志願者も終に目的を轉じて東宗に入り、或

は他に師を求むるありて失望の學生多ければ、同校西宗科教員田村宗立氏は去月廿一日辭職し、祇園下河原町に於て明利畫學館を設立し來十七日頃を卜し開館式を行ふ由

又日ノ出新聞二十二年十二月二十五日記事には

京都畫學校にては創立以來各教員の間に其流派の異なるより互に相好からざる氣味あり(中略)恰も各派混淆の一私塾とでも云ふべき有様にて(中略)自然校長の命令も行はれ難く(中略)斯る體裁にては(中略)畫學を教授するの學校たるに適當せずとの事より、校長も痛く之に憂慮し、各流派を一纏めにして東洋畫と名づけ此に西洋畫を加へて、學科及規則にも改正を加え、教員も多少交迭して教務を總務させる爲めに、畫伯幸野棹嶺を擧げて教頭の地位に置きたれば(中略)漸くにして教務上の一改革となしたる、茲に又西洋畫の教師たりし田村宗立氏は(中略)家事の都合を以て突然辭職し云々學制改革に就ては十九年六月のフエノロサの演説は參考すべきであらう。即ち彼は其の中で

宗派の稱は畫家互の間に於て分離の狀況を現はし、其進歩に於て大害を有するものとす。この分離の狀況を防ぐの策は畫家自身の美を愛せずして公平に諸般の美形を愛するの風にあり(日ノ出新聞六月十六日 譯者未詳)

と述べ、流派對立否定の風潮が漸く京都畫界へ浸潤せるを思はしむるものがある。而して此の風潮は流派否定の反面に日本美術を全面的に綜合して新美術を建設せんとする意圖を含めるものであつた。

此の必然的な反動として西洋畫に對する日本畫の優位性が強調されるに至り、十六年の工部美術學校の閉鎖、明治十七年第二回全國繪畫共進會、大阪繪畫品評會、十八年の名古屋繪畫共進會等に於る西洋畫閉出、二十年十月設立の東京美術學校の西洋畫科不設等は此の

風潮の具體的顯現であらう。

明治十七年第二回全國繪畫共進會閉會後京都より參考品として携帶東上せる古畫を京都在住の畫家は分擔で模寫し研究の資としたのであるが、之が主唱者は幸野棹嶺で、棹嶺の力善く京都畫家の多數を動かし得た事には當時の美術上に於ける國粹的風潮を考へ度い。而して之等は京都に於ける國粹運動の初歩的な顯現で畫學校に於る學制の改革は其の發展と見度い。従つて學制改革は前記京都日報所報の如き西洋畫の廢止、西洋畫への壓迫を必然的に含むものであつた。棹嶺と宗立は學制改革の問題を繞つて對立したと一般に稱されてゐるが、學制改革の實際の衝に當れる棹嶺と、當時京都に於る西洋畫派の先覺者宗立との間には、我が美術史上に於る當時の一般的宿命が介在したと觀るべきであらう。

日ノ出新聞は二十二年十二月二十四日、二十五日、二十三年一月十一日紙上に畫學校の紛議を報じてゐるが、京都日報も亦二十二年十二月二十三日、同二十五日、二十六日紙上に此の問題を取扱つてゐる。是等の内容を綜合すれば、一部學生は西洋畫科の學制の改革を以て教頭棹嶺の專斷と考へ其非を鳴らし、或ひは竊に新聞社に投書し、棹嶺私宅に赴いて辭職を強要する等學校の統制に従はず、爲に學校當局は是等學生の處分を考慮し、やがてそれを實行する等の事あり、紛議の表面化となつたのである。京都日報は更に東洋畫西洋畫が其各を主張して相剋する様を敘述してゐる。しかし此の紛議が相當深刻を極めたものであつた事は棹嶺も亦辭職するに至つたに

窺ひ得る。日ノ出新聞二十三年二月廿一日記事は此の問題の結末に就いて報じてゐる。

東京美術學校の例に倣ひ西洋畫を以て主となし、西洋畫の専門科は漸次廢する方針なれば近頃は入學生徒に對しても西洋畫の専門科の入學を斷り居るとのこと(中略)又曾て西洋畫生徒中退學を命ぜられたる者ありし際には、同科の生徒が一名を退くの外悉皆登校なさざりしも目下は大抵出席し至極平穩の姿なりと。因に記す曩に辭職したる幸野同校教頭心得は絶えて再び出勤するの念なき由なれど今に辭職の裁定を得ざる由

畫學校に於る西洋畫科の廢止は、此の時以來遂に今日に及んでゐる。田村宗立の後任として畫學校教師に就任せる疋田敬藏は同年五月卅日畫學校を退いた。榎嶺は再び出勤する事はなかつたと思はれるが、記録的には前記せる如く二十三年四月卅日辭任と爲つてゐる。畫學校は二十二年十二月京都市所管となり京都市畫學校と稱したが、二十四年四月京都市美術學校と改稱した。此時従前よりの校長(吉田)以下全職員は一應解職となり、各慰勞金若干が贈與され、畫學校は再編成を行つた。吉田校長、幸野榎嶺へは各二十圓が贈られたが、是が終ひに畫學校建議以來の榎嶺と畫學校の關係の終末であつた。

榎嶺の辭職と共に畫學校を退學し榎嶺門下に參じた學生は、榎嶺は之を一般塾生と區別し大成義會と命名した。大成義會は一年餘の後(二十四年十月二十八日)榎嶺私塾へ合併した。

註一 記録は京都市立美術工藝學校沿革略、日ノ出新聞記事、榎嶺履歷書等に據る。
註二 丹羽圭介氏談に據る。

幸野榎嶺の業績について

五

二十三年一月京都美術協會創立に際し、榎嶺は選ばれて其評議員となつたが、畫家中よりは協會設立の最主唱者であつた新歸朝の米偃と榎嶺であつた。三月には榎嶺は第三回内國勸業博覽會審査官として東上した。然るに六月に至り意に合はざる事ありとて突然京都に歸り一般を驚かした。^(註一)

京都歸還後間もなく六月十八日榎嶺は有樂館に於て博覽會報告會を開いて諒解を求めたが、此の報告會開催を主催せるものは青年畫家であつた事を森寛齋日記が物語つてゐる。即ち同日記六月十八日に

本日午後有樂館ニ於テ幸野氏東京ノ歸リノ咄ヲ聞フノ集會青年輩催ス
雄山遣ス

青年畫家の擡頭の事實を見るべきであらう。彼等は二十四年三月には日本青年繪畫共進會を開き、其自主的な動きは漸く表面化し、二十九年の後素協會の生誕に際しては終ひに其主體となるに至つたが、此の報告會主催の如き一つの萌芽と云ふべきであらう。而して此の頃より二十八年の第四回内國勸業博覽會を挟み、後素協會組織に至る間の京都畫界の特色は實に青年畫家の擡頭であつた。

二十三年榎嶺は審査官として東上せる外第三回日本美術協會展覽會に「賣花賤女圖」を、京都美術博覽會へは「麥隴雲雀圖」を出品し、且つ後者の審査委員の依頼をも受諾してゐるが、二十四年二月五日には突如として畫界引退の聲明を發し、^(註二)日本青年繪畫共進會役

員の中には彼の名を見出し得ない。

楳嶺の畫界引退に關し、其心情を窺ひ得るものに野村文學宛^(註三)の書簡がある。

(前略)當地も追々舊弊に立戻る「景況ニ而森翁は自己壹」家而已之事ニ止リ公共之事ニハ「一向手を被出不申其他老生」家ハ皆々無益之競争」ニ耽リ被居候此人達をして「責て壹ヶ月斗リ東京を」熟覽爲致候ハバ如今日拙策ニ汲々たる事も有之間敷「物をと是而已遺憾ニ存候」青年輩も亦上流之濁ニ酔ひ唯々虚事を「勤め表面を飾り候而已ならず」空論に走り薄情ニ流れ「實に京師之美術本願たる」繪畫も今貳拾年を「出ずして頽廢挽回之」期絶滅致候半事鏡ニ「かけて見るが如く嘆息之至ニ」候(中略)小生も無力」を感悟候間斷然隱居」致再び繪畫之名利場には「顔出し申間敷候此地之」前途御熟慮之上可相成は「兩君(米僊、文學)ニ而御救濟希望する」處に候

楳嶺は嘗ての莫逆の友米僊、文學に當時の畫界就中青年畫家に對する不滿の情を切々と披瀝して畫界引退の意を漏してゐるが、彼の青年畫家に對する不滿は金子靜枝への書簡中にも窺ひ得る。二十五年京都市美術工藝品展に際し、日ノ出新聞が老畫家の退嬰を難じたるに對し楳嶺は反駁文を金子靜枝へ寄せ是は日ノ出紙上(四月廿七日)に公開された。即ち此の中に楳嶺は次の如く述べてゐる。

此頃は筍の時候親竹より土中の新芽が世人の好評を得る折柄、まだ／＼日を追つて立延び候得ば、子もまた親にまさりけりなどと俳人に讃めそやされ、伸びるは／＼法圖もなく延立候(中略)尙今は美術々々と喧しい流行言葉につれ若手連は春風駘蕩の時を得て桃李の艶に誇り居候

しかし楳嶺は二十四年二十五年共に京都博覽會に關與し、二十五

年には田家秋景圖(シカゴ博出品、現東京帝室博物館藏)を描いた。此の圖は彼の持つ凡ゆる要素を綜合的に發揮し、其畫風の完成を誇るに足る作品である。時代の遷移に白眼を送りつゝ、尙鬱勃たる自己を示威せるものとも云ひ得よう。廿六年彼は帝室技藝員に任せられた。

楳嶺は廿七年に至つて病に襲はれる事があつたが、之が恢復後東本願寺大師堂の壁畫厨子裏金張附八功德水紺地金蓮華、兩餘間金張附八功德水紅白蓮華を描いた。楳嶺と東本願寺との關係は文麟に紹介され其後を襲つたものと云はれる。明治十一年(九州)十八年(北越)の兩度光勝上人の地方巡錫にも隨ひ、耶馬溪法帖、北越名勝帖(五卷)を完成する等の事あり其出入は楳嶺に恵する所甚大であつた。楳嶺は大師堂壁畫揮毫を以て其恩顧に報ゆる最大なものとし實に心血を注いだ。八月卅日附で菊池芳文、竹内棲鳳、谷口香嶠、都路華香等門下二十三人に廻文を以て飛檄し群青引等に其助力を求めてゐるが、其文中に楳嶺は次の如く述べてゐる。

寧ろ筆陣ニ戰没スルトモ徒^(註四)ニ病褥ニ斃死スル莫レ三寸呼吸ノ有ン涯リハ筆法ヲ磨シ進取敢テ他ニ一步ヲ讓ラザル是」日本畫人ノ本分也義務也楮老生御陰ヲ以追々快方ニ赴候處彌本願寺殿御用」畫着手期相逼リ候ニ付」未ダ全愈ニ不至候得共來ル」九月二日より着手可致事之」決定候

又十月廿日雨森雅正宛書簡には、第四回内國勸業博覽會出品の屏風畫揮毫を辭退し

老生モ病後之全力ハ既ニ本願寺壁畫御用之爲ニ竭盡疲憊之餘響何時臥褥候哉難計確乎タル御約束ハ申兼候

幸野煤嶺筆 帝釋試三獸圖

京都 幸野西湖氏藏

幸野
棟嶺筆
秋胡
妻採
桑圖

京都
竹內
栖鳳
氏藏

幸野
楳嶺筆
蘆州群
雁圖

愛知
鈴木
惣兵衛氏藏

と云ひ壁畫完成に如何に全力を傾けたかを窺ひ得る。

しかし畫が完成すると共に榎嶺は再び病臥し二十八年二月二日早朝終に長逝した。

註一 京都日報廿三年六月十五日記事及繪畫叢誌（二十三年七月廿五日發行）に據る。

註二 日ノ出新聞二十四年二月七日記事に據る。榎嶺は此の時「白梅や寒い間が花の役」の一首を吟じたと云ふ。

註三 野村雪江氏所藏、此書簡年次未詳なれども、廿四年六月八日の榎嶺より文舉への書簡（雪江氏藏）と相關聯せる内容を有するもので、是と前後せる頃のものとは推察される。

註四 森本東閣氏藏、幸野榎嶺遺芳所載。

附記

尙資料調査につき盡力を忝うし或ひは貴重なる資料を貸與されし幸野西湖、森本東閣、森公舉、加藤修、丹羽圭介、加藤英舟、宮武外骨の諸氏に謝意を表し度い。